

[博士論文審査要旨]

申請者:松嶋一成

論文題目 公的支援プロジェクトのマネジメント

審査員 青島矢一
延岡健太郎
西口敏宏

本論文は、独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)の支援を受けた民間 R&D プロジェクトを対象に、質問票調査とインタビュー調査を行い、公的支援の効果と、プロジェクトの成果を左右するマネジメント要因を実証的に明らかにしたものである。民間 R&D に対する公的支援の効果を実証した研究はこれまでに数多く存在するが、それらのほとんどは、国や産業といったマクロのレベルで効果を測定しており、本研究のように、成果につながるメカニズムをプロジェクトレベルで解明した研究はほとんどない。

本研究の中心的な発見事実は次のように要約できる。まず、公的支援への依存度が高いプロジェクトほど、社内で孤立する傾向があり、社内の他部門との情報のやりとりや、事業性に関する社内の関与が低下する。その結果、社内に蓄積された豊富な資源の活用が抑制されるとともに、事業化に向けた社内合意が得られにくくなり、技術成果の事業化が難しくなる。また、社内におけるプロジェクトの孤立は、開発された技術の外部への転用や社会的波及をも抑制する。こうした発見は、事業化目的の民間 R&D 活動を促進する上で、公的支援そのものに、重要な問題があることを示唆している。

本研究の貢献は次の三点である。第一に、民間 R&D 活動に対する公的支援の影響を、体系的な質問票調査から得られたデータをもとに、プロジェクトレベルで実証していることである。特に、成果変数として「事業化の正否」が明確となっているデータを活用していることが、結果の信頼性を高めている。第二に、回帰分析や共分散構造分析などの定量的な分析によって因果パスを解釈するだけでなく、詳細な追加インタビュー調査を行い、結果の解釈を裏付けている点である。第三に、マクロレベルで行われてきた従来の研究の理論的問題点を、ミクロレベルの研究から浮き彫りにしていることである。

ただし本論文には問題点もある。まず、定性分析による定量分析の補完が十分ではない。論文の構成にもよるが、インタビュー調査から得られた情報が、定量分析では見えない因果メカニズムを浮き彫りにするには、効果的に活用されていない。また、一部、定量分析の結果と定性分析の内容が矛盾する面も見られる。さらに、公的支援を受けたプロジェクトに焦点をあてた論文としては、公的支援の影響にかかわる部分の考察が不十分である。本来であれば公的支援を受けないプロジェクトとの比較分析が必要であり、少なくとも、その点に関する議論が必要である。

しかしながら、これらの問題点は本論文の基本的な貢献と価値を損なうものではなく、今後、本研究を発展させる中で対応できるものである。

よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第5条第1項の規定により一橋大学博士(商学)の学位を受けるに値するものと判断する。